

# OMEP



# OMEPニユ-ズ

Vol. 55 No. 1 2022. 5

Japan

OMEP 日本委員会事務局 発行

〒202-8585 東京都西東京市新町一丁目1番20号 武蔵野大学教育学部幼児教育学科 7316(義永)研究室内

<https://www.omepjpn.org/>(HP) <https://twitter.com/omep-japan>(Twitter)

**巻頭言**

## 今こそ「平和の種子を育てよう」

内藤知美 (副会長・田園調布学園大学)

ここに一冊の本がある。1985年にOMEPの元総裁マドレーヌ・グタール (Madeleine Goutard) が著した“Seeds for Peace” —The Role of Pre-School Education in International Understanding and Education for Peaceである。日本語版は、1988年に荘司雅子監修、OMEP日本委員会訳「平和の種子を育てよう—幼児期からの国際理解と平和教育—」と題して刊行された。この本を改めて読み返す時、OMEPの先人たちが、子どもに平和の種子を育てなければ、この世界は持続不可能であるという強い危機感と子どもたちに平和の種子を育てることが未来へ開かれるという希望を抱いていたことがわかる。グタールは、次のように述べる。

「世界のいずこにおいても、その賢者の教えのどこかで平和を奨励し、非暴力を訴えることを強調しない文化はおそらくないでしょう。しかしながら、平和のための教育を促進させる世界的規模の運動がとくに今日引き起こされるに至ったのは何よりも第一に、人類絶滅という恐ろしい脅威によるからです。」30年以上前のこの言葉に、我々が直面している現在の社会状況が重なる。そして拡大を続ける恐ろしい脅威の前に、子どもに関わる我々が、まずは乳幼児期からの「平和教育」に渾身の力をこめることが最大の責務であることに気づかされる。

「もしも子どもたちの平和が脅かされているならば、未来の世界平和に何の希望があるのでしょうか。もしも私たち大人が、まずは子どもたち自身の内部に平和をつくり、それがいつか外に花開くように助けないでいて、どうして子どもたちがいつの日にか世界平和の責任を担うようになると期待することができるのでしょうか」

危機への警鐘が鳴らされていたにもかかわらず、なぜ、そのことがいかされなかったのであろうか。改めて平和を維持することの難しさを痛感する。平和という言葉を使うことは簡単だが、平和の種子は、一朝一夕には育たない。子どもたちの内部に平和を作り出すことは、「争いはいけない」といった大人の定める社会のルールで子どもをしぼるのではなく、子どもが体験を通じて、欲求や葛藤、充足の経験を積み上げながら、他者との関わりの中で、互いにとって「巧みなバランス」にとどまる力を育てることであろう。「服従でも反逆でもないやり方で葛藤を解決し、日常生活で変化する感情や出来事の中で平和を保つことができる」ためには、「最も早い時期から創造性を育むこと」であると、グタールは述べている。

現在を生きる子どもの状況に、改めて平和の視点から目を向けてみる。保育者が硬質な言葉で平和を誘導、指示するのではなく、子どもたちと保育者がともに作りだす生活の中に、平和と非暴力の文化を育てよう。想像と創造を繰り返す遊びや生活の中に、平和の種子は花開く。子どもたちの平和が脅かされているとしたら、まずは教育・保育の「土壌」を豊かにすることであろう。乳幼児期から平和の種子をまくこと、そして育てることは我々OMEPの使命である。そして子どもにとっての平和教育とは何かを理論的に研究していくことも等しく重要な使命であると考えます。

〽	▶ 巻頭言「今こそ『平和の種子を育てよう』」/目次	1
目	▶ 2022年度活動方針/総会報告	2-4
次	▶ OMEP-JAPAN子どもファンドプロジェクトご報告とご案内/会員交流会報告	4-6
	▶ 日本保育学会第75回大会国際シンポジウム報告/世界OMEPの窓から	6-7
〽	▶ インフォメーション/事務局より	8